

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520369

研究課題名(和文) リルケとゲーテの連関に関する実証的・歴史的・哲学的研究

研究課題名(英文) Empirical, historical and philosophical studies on the relation of Rilke and Goethe

研究代表者

黒子 康弘 (Kurogo, Yasuhiro)

日本女子大学・文学部・准教授

研究者番号：50305398

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、20世紀のリルケ研究を、ドイツ国内と外部の両面から批判的に検討することができた。これまで無視されてきた「ゲーテとリルケの連関」について、その問題設定の哲学的、歴史的意義を明確にした。それに伴い、戦前から戦中の「ドイツの詩人リルケ」という言説の形成が具に観察された。またそれと対を成す「ドイツの神の探求者リルケ」という言説についても一定の理解を得、その問題性を研究史上に位置づけた。リルケとゲーテの内的連関については、いわゆる「ベッティーネ体験」をめぐる全く新たな見解を示すことができた。リルケの宗教的アイデンティティ、ドイツ性、オーストリア性について、ニーチェとの比較で論じた。

研究成果の概要(英文)：By this study, the Rilke researches of the 20th century in Germany and other countries could be critically examined. The theme "relation of Goethe and Rilke" has been ignored up to now. Philosophical and historical significance of this theme had to be clarified. Along with it, the generation of the discourse of "the German poet Rilke" before or during the Second World War has been observed. Also for the discourse of "Rilke as a poet exploring God", a certain understanding was obtained. And its importance was positioned to study history of rilke. For the internal relation of Rilke and Goethe, a completely new view on the so-called "Rilkes Bettine experience" could be shown. Furthermore religious identity of Rilke and German or Austrian identity of Rilke were discussed in comparison with Nietzsche.

研究分野：独語・独文学

キーワード：リルケ研究史 ゲーテ受容 詩的モデルネ カトリック ニーチェ批判 ベッティーネ体験 時禱書
神秘主義

1. 研究開始当初の背景

「リルケとゲーテ」というテーマ設定は、ドイツ本国では、1936年に雑誌 *Dichtung und Volkstum* 『文学と国民性』に投稿された Carl Sieber の論考を嚆矢とする。これには翌年 1937年に Siebels と Kretschmar が続いたが、戦後このテーマはドイツでは振り返られることなく、英国のドイツ文学研究者 Mason(1958)によって、いわば「ドイツ国外」で論じられた。これに対し、ドイツから積極的な検証ないし後継研究がなされたように見えない。やがて、熱烈なゲーテ愛好家 A.Kippenberg を創業者に持つインゼル書店の後継者 S.Unseld(1978)が、インゼル小文庫 1000 号記念にリルケとゲーテの関係をようやく集中的に取り上げたのが戦後ドイツ人によるこのテーマへの特筆すべき唯一の寄与であった。その後は、J.Steiner(1991)が Mason(1958)を回顧的に取り上げたのみである。結局は分量と内容において Mason(1958)が圧倒していて、それに Unseld(1978)が独自の観点から補完を試みたが、その後停滞しているという状態である。わが国に至っては、殆ど研究されていない、というよりテーマそのものが知られてもいないという惨状である。あえて言えば、日本ゲーテ協会『ゲーテ年鑑』にこれまで3つの論考が発表されているのみであり、それらのいずれも Mason(1958)の研究の要約の域を出ないものである。研究代表者は、2008年度に集中的にゲーテの「世界文学」について、さらに2009年度にゲーテの「情熱」について研究を行う中で、ゲーテの先駆的な問題設定が百有余年の時を超えて、19世紀末から20世紀前半の詩人や文学者によって本格的に再構成されるにいたったこと、したがって、1930年代のゲーテとリルケを関連付けようという一連の動きが、決してナショナリズムによる牽強付会と言えないことを確信するようになった。この認識が本研究の出発点である。

2. 研究の目的

「リルケとゲーテの連関」というテーマは、ナチス独裁下においてリルケを過度に「ドイツの詩人」として称揚するために導入され喧伝された、間違った論点ではないかという疑念もあり、これまで積極的に論じられてこなかったように見受けられる。実際にリルケが、真意を隠して過度のゲーテ嫌いを装っていた時期があったことから、一般に(研究者の間でも)リルケはゲーテから殆ど影響を受けていないという誤解が定着してしまっていることもこの原因であると考えられる。ところがつぶさに見れば、リルケは少年期から青年期に集中的にゲーテを読み込んで、ゲーテの詩句を自らの詩作に翻案するなど多大な影響を受けている。その後、ゲーテから離

反した時期を挟み、壮年期に思い立ったように再び集中的な読書を行い、ゲーテの真価に目を開かされてもいる。本研究ではこの経緯を覆い隠す研究史上の誤解を払拭すると共に、その誤解の元となった、戦中にリルケに冠せられた「ドイツの詩人」という言説についても、当時の雑誌論文などを参照しながら、批判を加える。これらの作業を行うことで、戦時中の文学的スローガンによる虚像や、単なる影響の有無という表面的な関連の奥底に、リルケとゲーテを結びつける実質的な文学的・思想的連関の有無を探究することが主眼である。そのために、以下のような個別の目標を、研究当初に設定した。

まずわが国においては全く紹介されていない(ドイツ本国でも一般に知られていない)リルケの書簡について調べ、もしあれば、それをゲーテとの連関という観点から整理し、データベース化することである。もしそれができれば Mason(1958)の研究を超え、また Unseld(1978)のそれに比するような独創的な研究の基盤を構築できるはずである。

この探索と並行して、ナチス時代のドイツの政治・歴史状況に応じて「リルケ」=「ドイツの詩人」なる言説がいかに形成され、またそれが戦後逆に否定され、そのことがリルケ研究と受容にどう影響を与えてきたのか、リルケとゲーテの関係を軸に、「ドイツ文学史」の再検討を行う。これは数あるリルケ研究でも閑却されてきた視点であり、これを追究することは本研究の第一の独創性に関わることであると考えられる。

さらに、以上によって明らかになったリルケとゲーテの検証可能な客観的関連性の奥に、一歩進んで、「感情 Gefühl」、「雰囲気 Stimmung」、「情念 Affekt」といった近代ドイツ抒情詩人に通底する問題意識を取り出し、そしてそれを、二人の詩人の生きた時代の社会状況、思想、哲学、芸術、歴史的位相に照らして論じることによって、近代抒情詩人の営為を幅広い脈絡において新たに捉えなおせるのではないかと考えている。この第三の論点は、ゲーテとリルケの連関という純粋に詩学的に見える問題設定を、歴史的次元へと切り開くという点で重要である。

3. 研究の方法

没後 85 年余り経った現在でも、リルケの書簡には未公刊のまま残されているものが多い。ゲーテとリルケの関係を解き明かす鍵となる Nora Goudstikker 宛書簡(1897年3月25日付)もそのようなものであった。この書簡の存在は、リルケの娘婿であった Carl Sieber(1936)が初めて明かしたが、その後の研究者、例えば Mason(1958)や J.Steiner(1991)などは、直接原手稿にあらず、Sieber の論考からの孫引きを繰り返すのみである。本研究は、このような問題性が認め

られる書簡の複写を Marbach の Deutsches Literaturarchiv で行い、手稿の読解を行うことから開始する。さらに続けて、リルケとゲーテの関係を示すその他未公開の書簡の割り出しと読解を行う。リルケの未公開の書簡の発掘は、原則として Ferenc Szász の Konkordanz zu den veröffentlichten Briefen Rainer Maria Rilkes (2006, Aktualisiert von Rätus Luck, 2010)を用い、それと海外の文書資料館のデータベースとの照合によって行う。

その上で、研究期間前半は未公開書簡の複写の収集と読解を着実にすることとする。収集の手続きはネット上でできるものは直ちに行い、文書館で公開されていないものや個人や古書店所有のものに関しては、実際にドイツ、オーストリア、スイスなどに直接赴いて調査、交渉しなければならない。

さて、この地道な作業に並行して、目的にも書いた第三の研究成果に関して予備的研究を開始する。具体的に「感情 Gefühl」、「雰囲気 Stimmung」、「情念 Affekt」といった近代ドイツ抒情詩人の問題意識を、ゲーテとリルケの生きたそれぞれの時代の社会状況、思想、哲学、芸術、歴史的位相に照らして論じることができるよう、関連する歴史書、リルケ研究書、ゲーテ研究書、哲学・思想書、文化理論書、図版などを幅広く収集し、その読解を行う。現段階ですでに手元にある研究書から開始し、こちらでも継続的な読書によって、研究の最終段階におけるバランスのとれた客観的な記述への準備を行う。

そして、本研究の最も独創的であると考え、ドイツにおけるリルケ受容の開始と「ドイツの詩人」の言説形成の経緯の解明を行うために、特に日本国内では手に入らない戦前・戦中の古書・雑誌を中心に収集し、その読解を行う。特に問題となるのは 1930 年代の文芸思潮の特徴である。例えば Dichtung und Volkstum 『文学と国民性』は、ナチスが政権を取った翌年 1934 年に、雑誌 Euphorion が編集者の意向で名称変更されたものである。この雑誌において、リルケの評価が本格的に開始され、同時にゲーテとの関連が指摘されたことは本研究で第一に注目する事実である。リルケの未公開の書簡の収集と分析に平行して、まずは Dichtung und Volkstum 『文学と国民性』の文学観・ドイツ観について分析を行う。さらに、この分析に客観的品格を与えるために、Deutsche Vierteljahresschrift の同時代の論文についても、リルケやゲーテ関係に限らず幅広く読み込み、この時代の文芸思潮の全体像を的確に把握するように努める。Dichtung und Volkstum と Deutsche Vierteljahresschrift に関してはすでに複写を幾つか所蔵しているが、まだ不完全であるので、調査を行い本研究に関連するものを複写・収集する。

その上で、纏めに入る研究期間後半には、前半の成果を一つの有機的な全体へと纏め

上げるために以下のような作業を行う。

第一に、収集・読解されたリルケとゲーテの内的な連関を示す未公開書簡を、公刊済み書簡集や作品・草稿・断片というすでに知られている座標の中で正当に評価し位置づける。第二に、Dichtung und Volkstum や Deutsche Vierteljahresschrift といった雑誌に代表されるリルケ受容の最初期における文芸思潮の特徴を明らかにし、戦前と戦後における「ゲーテとリルケ」というテーマの問題点と可能性を客観的に記述する。第三に、第一の論点「リルケ自身の言説の分析によって浮かび上がるリルケとゲーテの連関」を、第二の論点「リルケ没後最初期の受容と戦後の評価の分析によって浮かび上がるもの」に掛け合わせて、いかなる像が見えてくるのか、両者の齟齬や符合などについて丹念に記述する。第四に、第三の論点で明らかになったことを、ゲーテ時代からリルケの時代、さらに現代に通じる大きな歴史的脈絡の中で、批判的に検討する。この段階で、「リルケとゲーテの連関」の様々な検証可能な客観的事実の奥に一步踏み込んで、「感情 Gefühl」、「雰囲気 Stimmung」、「情念 Affekt」といった近代ドイツ抒情詩人の共通の問題意識を追究し、それを、二人の詩人の生きた時代の社会状況、思想、哲学、芸術、歴史的位相に照らして論じることが試みられる。

4. 研究成果

2012 年度から 2015 年度までの 4 年間で、計 4 回渡独し、主に Marbach の Deutsches Literaturarchiv にて資料収集と読解を行い、ドイツの古書店で関係資料を収集した。初めは 1897 年に集中して書かれた一連の Nora Goudstikker 宛書簡の複写と読解から開始し、Sieber(1936)からの孫引きで済ませられることが常だったこの書簡の全貌をつかむことができた。ただし、この際 Marbach の Deutsches Literaturarchiv に所蔵されているリルケの手書き書簡は、一日に閲覧できる件数及び、複写申請できる枚数が極めて制限されていること、そのため今回の限られた研究期間内では本研究の第 1 の目標を十全に達成することが難しいことが、初年度の訪問で分かった。

そこでこの作業は可能な限りにおいて継続することにし、本研究の目的の第 2、第 3 の論点の解明に今回の研究期間ではより比重を置くこととし、第二次世界大戦前夜や戦中ドイツにおける「ドイツの詩人としてのリルケ」の言説形成過程と、戦後のドイツ、英国、日本におけるその言説に対する反応の解明に次年度から重心をずらした。Marbach の Deutsches Literaturarchiv で、当初予定していた 1930・40 年代の文芸雑誌 Dichtung und Volkstum や Deutsche Vierteljahresschrift の記事や論文に加え、日本国内では入手でき

ない多くの辞典、雑誌、単行本をより幅広い時代に互って参照することができたことにより、次年度は「ゲーテと Rilke」というテーマに対する内外の研究者らの反応を俯瞰する論文、それに加え、1940年代前半の、ナチス追従文学者による恣意的な読解による「捻じ曲げられた Rilke 解釈」について纏めた論文を執筆することができた。

さらに翌年は、継続して戦前の 1930 年代から 40 年代にかけて出版された書籍と雑誌論文、特にその中でも Paul Zech, Robert Faesi, Lothar Erdmann, Fritz Dehn, Hermann Pongs などの論を読解すると共に、Eudo C. Mason の殆どの著作に目を通すことができた。ゲーテと Rilke の内的な連関を示すとされている多くの論点から、その核心部分である「ベッティナー体験」に関する Mason の見解に批判を加え、独自の解釈を打ち出すことを目指した論文を執筆することができた。

1 年延長した研究期間の最終年度には、本研究の総まとめとして、戦前から現代に至る Rilke 受容史・研究史を批判的に記述することに傾注した。今研究で重心を置いた「ドイツの詩人としての Rilke」と対をなす「ドイツの神の探求者としての Rilke」という論点が徐々に明確になって来たため、この観点を導入し、Franz Koch, Fritz Dehn, Hermann Pongs の論を批判的に検討し、戦前から戦中、そして戦後へと、Rilke の神の探究の書『時禱書』が辿った数奇な受容の運命について論文にまとめることができた。また、その観点からの発展として、Rilke の宗教的アイデンティティ、ドイツ性、オーストリア性について、ニーチェとの対比によって論じた論文も仕上げることができた。

以上研究成果で言及した論文は、以下のリストを参照されたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

黒子康弘：Rilke・ドイツ・オーストリア 故郷喪失と言語への意志
日本女子大学『紀要(文学部)』第 65 号
2016 年 3 月 101-116 ページ(査読無)

黒子康弘：『時禱書』・心的外傷・文献学
Rilke 研究史批判
日本オーストリア文学会『オーストリア文学』第 32 号 2016 年 3 月 25-35 ページ
(査読有)

黒子康弘：若き Rilke とゲーテ
愛と彷徨のゼマンティック
日本女子大学『紀要(文学部)』第 64 号
2015 年 3 月 103-121 ページ(査読無)

黒子康弘：ナチス時代の Rilke
1940 年代前半に読む抒情詩人
日本女子大学『紀要(文学部)』第 63 号
2014 年 3 月 59-70 ページ(査読無)

黒子康弘：「Rilke とゲーテ」という主題
について Rilke 受容史に関する批判的
考察

日本女子大学史学研究会 『史艸』
第 54 号 2013 年 11 月 27-45 ページ
(査読無)

[その他]

ホームページ等 無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒子 康弘 (Kurogo Yasuhiro)
日本女子大学・文学部・准教授
研究者番号：50305398